

論 文

説明文における「段落」と「語落」

鄭 高 咏

要 旨

1980年代に入ってから、中国では“句群”の研究がたいへん盛んになった。文法学者により提言されたこの概念は、文法学界、文章学界、修辞学界などから注目され、さまざまな角度から“句群”の研究が始められたが、角度の違いゆえに、その呼称は“句群”，“語段”，“句組”，あるいは“超句統一体”と研究者によってまちまちであった。こうした状況の中、すでに故人となった文章論研究の権威、張寿康氏は、「一つのセンテンス」＝「一つの自然段落」＝「一つの“語段”」となっているものについては“句群”という呼称を用いることはできない，“語段”と呼ぶべきであろう、と問題を提起した。にもかかわらず、その後の研究においても研究者たちは“句群”，“語段”，“句組”と思いつきの呼称を用いていたが、いずれも「二つもしくは二つ以上のセンテンスである」という出発点は一致していた。そこで本稿では、多数の文章を分析して張氏が提起した問題に検討を加え、“説明文”¹⁾におけるセンテンスと段落の間に「語落」という単位が存在することを確認し、新しい用語として提言した。そして「文法論的文章論」の観点から説明文の中層構造の内容を改善し、張氏の学説を発展させることを試みた。

キーワード： 句群（文群），語段，大段落，小段落，大語落，小語落

1 はじめに

“sentence group”という術語を生み出したのはオランダの文法学者 R.W. Zandvoort であり、1945年、その著書『A Handbook of English Grammar』で初めてこの語を用いた。しかし文法学者たちは長年にわたる伝統的な文法の観念に捕らわれていたため、当初、この“sentence group”（“sequence of sentences”ともいう）に関する本格的な研究に乗り出そうとしなかった。

“sentence group”は“句群”、“語段”、“句組”、“超句統一体”など、いくつかの中国語に訳されたが、その呼称のいかんにかかわらず、文法学者や修辞学者、文章学者の間にはある共通認識があった。それは「二つもしくは二つ以上のセンテンスで構成され、意味的に独立かつ完結している」ものを指すということである。これに対し、文章学の権威、故・張寿康氏（1981）は、「一つのセンテンスが一つの段落となっており、意味的に完結かつ独立した文を“句群”と呼ぶことはできない」と指摘した。彼は文章学²⁾の見地から、“句群”という呼称に賛同しかねたのである。しかし、ここ数年で“句群”の言い方が定着した。“句群”研究に関しては、文法学者が比較的詳細に検討しているほか、“修辞学”、“話語語言学”、“倫理学”の分野でもそれぞれ異なる角度から、ある程度の研究がなされている。もちろん“文章学”も例外ではないが、張氏が提起した問題はいまだに掘り下げられていない。なぜならば、研究の重点が専ら「複数のセンテンス」のグループに置かれているためである。

本研究では、“句群”研究の現状を明らかにした上で、「文法論的文章論」の観点から具体的な文章を分析し、張氏が提言した“語段”について検討を加え、さらに文章構成の階層をより明確に形式化することを試みる。尚、今回の研究対象は“説明文”¹⁾に限定した。

2 “句群”³⁾に関する先行研究

(1) “句群”研究の流れ

言語において、相対的に完結した考えを述べることのできる単位はセンテンスであり、センテンスとは言語表現の基本形式である、とするのが一般的な見解である。だが、事実の叙述、人物や風物の描写、あるいは論理の説明や意見の発表などをする際に、必ずしも一つのセンテンスだけで一つの考えを述べるわけではなく、二つもしくは二つ以上のセンテンスが用いられることもある。この二つもしくは二つ以上のセンテンスによって構成されるセンテンスのグループが注目され始め、20世紀初頭から、「センテンスより大きな言葉のグループ」に関する萌芽的研究が次々に行われた。さらに1980年代に入ると、これに関

説明文における「段落」と「語落」

する論文や著述が相次いで上梓されるようになった。

前述したように、“sentence group”には“句群”、“語段”、“句組”、“層次”、“超句統一”といった中国語の訳語がある。しかし、これらの呼称が意味するものはすべて同じであるとは限らず、また具体的な観点が多少異なっているものの、今日では多く“句群”と称されている。中国における“句群”研究は、文法学や文章学の発展と関連しているだけでなく、修辞学、論理学の発展、言語環境論、言語分析及び人と機械のコミュニケーションの研究、国語教育や第二言語教育など、幅広い分野とも密接にかかわっているのである。まず初めに文法学者たちが、一つのセンテンスのみで正誤を判断したり、意味を理解したりするだけでは十分に把握できないという事実を認識するようになった。さらに、一つのセンテンスだけを取り上げて考えると文法的に問題があり、そのような表現はありえないが、センテンスより大きな言葉のグループの中でとらえると、コンテキストが生じることによって非の打ち所がなくなり、絶妙な言い回しとなる場合もある、という点に着目した。一方、これと逆のケースも存在する。つまり、それぞれのセンテンスを別々に切り離して考えると、いずれも文法上問題がなく、意味もはっきりしているのだが、これらを一つに組み立てるとかえってちぐはぐになってしまい、時に別の意味まで生じることすらある。こうしたケースを踏まえ、文法学者たちは文法の研究範囲をセンテンス以下の単位に限定していた従来の観点を再検討すべきである、との意識に立ち至った。そこで一部の文法学者は伝統の殻を打ち破り、“句群”を文法教育の体系に組み入れ、最大の文法単位として扱うようになったのである。呂叔湘氏(1979)はこう指摘している。“一般讲语法，到句子为止，句子是最大的语法单位，因此句子只有结构分类，没有功能分类。其实这也是一种老框框。”⁴⁾〔訳：文法というと、通常センテンス止まりで、センテンスが最大の文法単位となっている。これゆえに、センテンスには構造の分類はあっても、機能の分類はない。実はこのことも旧来の枠組みの一端なのである〕。これは文法研究が伝統的理論のくびきを断ち切るときの声であったと言えよう。1980年には「中学語文教学」という雑誌が“句群”の問題について討論を企画し、多くの学会誌が続々とこれに応じた。そして1981年7月、ハルビンで開催された「全国語法和語法教学討論会」において、“句群”は言語の表現単位として正式に文法教育の体系に組み入れられたのである。これに伴い、“句群”に関する研究は急速な高まりを見せることとなった。

では、文章学からのアプローチはいかなるものであったのだろうか。以前、文章学の研究対象は「自然段落」から始まり、完結した文章に帰結するのが常であり、“句群”に着目していなかった。南北朝の齊・梁時代に刊行された中国初の文章学の大著『文心雕竜』の「章句・第三十四」において、著者である劉勰は言語の単位を字・句・章・篇に分類し、“夫人之立言，因字而生句，积句而成章，积章而成篇。”と記述しているが、この“章”は現

在の「段落」、あるいは「自然段落」に相当する。そして“章”と“篇”を合わせて“篇章学”とし、これを文章学と考えていたことは、多くの文章学者の見解が一致するところである。つまりこの学問の研究は「自然段落」より始まったのである。そして1960年代以降、張志公氏の「辞章学」理論の影響を受けて、文章学は文と文の関係に注目し始め、文法学者の提言した“句群”の概念を取り入れた。こうして文章学研究は“句群”にまで拡大されたのである。

(2) 「文法学」と「文章学」における“句群”

① 文法学における“句群”

多くの文法学者は文法学、特に文法教育の体系において、文法の単位を五つに分類している。すなわち、形態素<単語<フレーズ<センテンス<“句群”である。“句群”は文法の最大単位であり、1984年に教育部（日本の文部科学省に相当）が発表した「中・高校教学文法概要」では“句群”を以下のように定義している。“句群，也叫句组，或称语段，是前后衔接连贯的一组句子。一个句群有一个明晰的中心意思。”〔訳：“句群”は“句組”ともいい，“語段”と称することもある。前後相連なる一組の文を指し、一つの“句群”はある明確でまとまった意味を有する〕。

つまり“句群”とはセンテンスより大きな文法単位であり、センテンスの数は二つもしくは二つ以上でなければならない。センテンスより大きく、段落より小さい表現単位なのである⁵⁾。

② 文章学における“句群”

“句群”研究で有名な文法学者、呉為章氏と田小琳氏は、“句群”を文法学と文章学に共通する単位と認めてはいるものの、次のような主張もしている。“文章的单位由小到大可否大致划分为：段落（自然段）<部分（片断）<节<章<篇；而句群和句子都只是构成段落（自然段）的材料，都不是文章的单位，尽管它们和自然段有重合的时候，也就是它们有独立成段的时候，但是并不等同于段落。”⁶⁾〔訳：文章の単位をだまかに区分するならば、小さいものから順に、段落（自然段落）<部分（グループ）<節<章<篇とすべきであろう。“句群”とセンテンスは段落（自然段落）の構成要素に過ぎず、いずれも文章の単位ではない。これらが自然段落と一致する、つまり単独で段落となっていることもあるが、段落とイコールではない〕。要するに彼らは依然として、文章の最小単位を自然段落と見なしており、“句群”は文章構造に固有の小さな単位、すなわち文章を分析する際の術語に過ぎないと位置付けているのである。

これに対し、有名な文法学者である張志公氏は決然たる態度を取り、著書『句群』（1990年、人民教育出版社）で次のように断言した。“句群是语法研究的对象。段（或称作自然

説明文における「段落」と「語落」

段)是文章学研究の対象。在语法中研究句群和段的区别,是为了从比较大的段中切分出句群来,从而更准确地研究各个句群的语法结构和语义联系。”〔訳:“句群”は文法学の研究対象であり,段落(あるいは自然段落ともいう)は文章学の研究対象である。文法学で“句群”と段落の区別を研究するのは,比較的大きな段落から“句群”を取り出し,各“句群”の文法の構造と語意のかかわりをより正確に探究するためである〕。

有名な文章論研究者の故・張寿康氏は,1981年に人民教育出版社から出版された『現代漢語』下巻で次のように述べている。“語段前(包括語段)归语法,語段以后(包括語段)归文章学。”〔訳:“語段”(“語段”を含む)以下は文法学に属し,“語段”(“語段”を含む)以上は文章学に属する〕。つまり“語段”は文法の最大単位であり,かつ文章の最小単位でもあるとしているのである。張氏は“句群”という名称は避け,“語段”と呼ぶことを主張した。これは文章学を研究する際,実際の文章には一つのセンテンスが自然段落となっているケースが往々にしてあるためである。さらにこのような自然段落が一つの“語段”である場合,“句群”という呼称は当てはまらなくなってしまう。“群”は複数を意味するからである。

しかし張寿康氏は亡くなられ,自身が提起したこの問題をさらに考察することはかなわなかった。その後曹祥芹氏が,張氏により提起された“語段”について研究を行ったものの,新たな展開は見られていない。そして結局,文法学者たちは思い切った判断を下し,張寿康氏の“語段”について論じる際には,“語段”イコール“句群”とし,“語段”と“句群”を同等に位置付けたのであった。文法学者たちが提起した“句群”という概念を,文章学の方法から今一歩掘り下げて検討する学者は,いまだ現れていない。

3 問題点

“句群”は「少なくとも二つのセンテンスで構成される単位」に限定され,しかも“句群”は必ずある明確な考えを述べている」。ならば一つのセンテンスのみで完全な意味を表している場合は,どう解釈すべきか。これに対し“句群”研究から出された回答では,上記のようなものは“句群”ではなく,一つのセンテンス,あるいは“句群”の派生形であるとされた。呉為章氏と田小琳氏は著書『漢語句群』の15ページで,次のような例を用いて“句群”の定義を説明している。尚,文中の通し番号は原文のままである。

用例二:1 (1) 目前,最大的机器人是美国制造的。(2) 1974年曾用它来打捞一艘重4千吨的潜水艇,它的最小机器人可以把90米长的潜水艇从海底拦腰抱起。2 (3) 最小的机器人用在日本精工手表装配线上。(4) 这种微型机器人,如同百货店玩具柜里最小的洋娃娃一般大。(5) 它纤细的手臂和灵巧的小手指,十分精确地把一个个机芯装在流水般

送来的一只只小手表壳里。3 (6) 我国也生产了机器人，在我国西南原子反应堆上，机器人用那灵活的手，在人们无法接近的核辐射环境中，不知疲倦地处理着核燃料和核废物，工作得十分出色。(汤正华《机器人世界》)

理解の一助として、これを原文の通し番号順に、日本語に直訳してみよう。

〈日本語訳〉

用例二：1 (1) 現在，最大のロボットはアメリカ製である。(2) 1974年にそれを使って4千トンの潜水艦のサルベージが行われたが，そのロボットアームは全長90メートルの潜水艦の中央部をつかんで海底から引き揚げた。2 (3) 最小のロボットは日本のセイコーの腕時計組み立てラインで利用されている。(4) このタイプの小型ロボットの大きさは，デパートのおもちゃ売り場にある最小の人形と同じくらいである。(5) その繊細なアームと小さく器用な指先は，流水のごとく送られて来る小さな時計の外装部品へ，とても精確に内装部品を取り付ける。3 (6) わが国でもロボットが生産され，西南部の原子炉では，人間が近づくことのできない放射能に汚染された環境の中，ロボットがその敏捷なアームで，疲れることなく核燃料と核廃棄物を処理し，優れた働きを見せている。(湯正華『ロボットの世界』)

呉，田両氏による説明は以下の通りである。この自然段落は三つの意味から構成されている。1は二つのセンテンスからなる“句群”であり，最大のロボットについて述べている。2もまた三つのセンテンスで構成された“句群”で，最小のロボットについての説明である。そして3は中国のロボット事情を述べているが，センテンスが一つしかないため“句群”とは言えない。そこで両氏はこう解説している。この自然段落の主題は“目前，世界上机器人的制造和使用情况。”〔訳：今日の世界におけるロボットの製造及びその使用状況〕である。ゆえにこれは“包括有六个句子的三重句群，它既是句群也是段落。”〔訳：六つのセンテンスで構成される三つの“句群”であり，同時に段落でもある〕。

3のようなセンテンスに関する説明に，両氏は苦慮している。なぜなら，3は明確でまとまった意味を述べているものの単独のセンテンスであり，“句群”の定義にある「複数のセンテンス」という条件は満たしていない。ゆえにセンテンスの“群”とは言えないが，この自然段落，すなわちこの“大句群”における一つの階層となっているため，1・2と同レベルで扱わざるを得ない。こうなると，形態素<単語<フレーズ<センテンス<“句群”という従来の等級にそぐわなくなってくる。筆者は，文章を分析する際にセンテンスと“句群”を同レベルで扱うべきではない，少なくとも同列に論じてはならないと考える。こう述べると，文章学研究の第一人者である張寿康氏(1980)が提言した“語段”の概念が想起されよう。氏は『文章学導論』で⁷⁾この問題に触れている。それによると，実際の文章で，一つのセンテンスが一つの自然段落であると同時に一つの“語段”で，なおかつ明確な考

説明文における「段落」と「語落」

えを述べている、というケースはよく見られ、このようなセンテンスを“句群”，あるいは“句組”とは呼べない。しかし前述したように、文章学の観点からこの問題を詳しく検討する動きが見られなかったため、最終的に文法学者たちが“句群”という名称に統一したのであった。

次に呉，田両氏が葉聖陶の『以画為喻』という文章をどのように分析しているかを見てみよう⁸⁾。ここでは第2段落を例示するにとどめる。尚，文中の通し番号は原文のままである。

(二) 1 (1) 这类图决不能随便乱画。2 (2) 首先须把画的东西看得明白，认得确切。(3) 比如画猫罢，它的耳朵怎么样，它的眼睛怎么样，你如果没有看得明白，认得确切，怎能下手？(4) 随便画上猪的耳朵，马的眼睛，那是个怪东西，决不是猫；人家看了那怪东西的图，决不能明白猫是怎样的动物。(5) 所以，要画猫先得认清猫。3 (6) 其次，还得练成熟习的手腕，心里想画猫，手上就得画成一只猫。(7) 像猫这种动物，咱们中间谁还没有认清？(8) 可是，咱们不能个个人都画得成猫；画不成的原因，就在乎熟悉的手腕没有练成。(9) 明知道猫的耳朵是怎样的，眼睛是怎样的，可是手不应心，画出来的跟知道的不相一致，这就成了猪的耳朵，马的眼睛，或者什么也不像了。(10) 所以，要画猫又得练成从心所欲的手段。

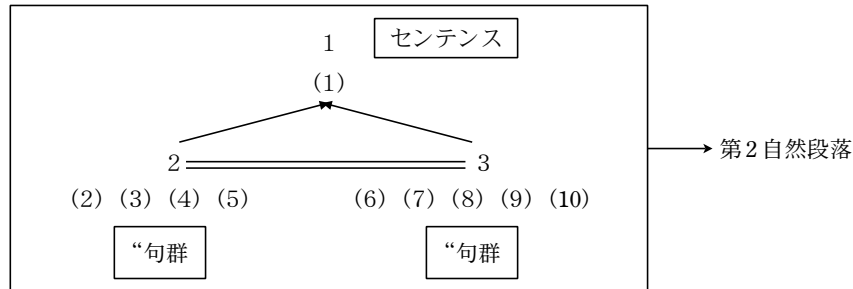
先と同様，これも日本語に訳してみよう。ただし中国語が一文であっても，それに則して訳すと不自然な日本語になる場合は，複数のセンテンスに分けて訳出した。

〈日本語訳〉

(二) 1 (1) このたぐいの絵はやみくもに描いてはいけない。2 (2) まず描くものをしっかり見て，きちんと識別しなければならない。(3) 例えば猫を描くとき，その耳はどんなものか，その目はどのようになっているのか，これをしっかり見ず，きちんと識別しないままでは，どうして描けようか。(4) いいかげんに豚の耳と馬の目を描いたら，それはへんてこなものであって，猫ではない。人がそのへんてこなものの絵を見ても，猫がどんな動物なのかまったく分からないだろう。(5) だから猫を描くなら，まず猫をはっきり識別しなければならない。3 (6) 次に，腕を磨いて習熟する必要がある。猫を描きたいと思うなら，手でさっと猫を描かねばならない。(7) 猫みたいな動物をまだ識別していない者があるだろうか。(8) けれども誰もがみな，猫を描けるわけではない。描けない原因は腕が習熟していないからだ。(9) 猫の耳がどんなものか，目はどのようになっているかを熟知していても，手を思い通りに動かせねば，描き出すものは知っているものと違う形になってしまう。豚の耳や馬の目になるか，それとも何にも似ていないか。(10) だからこそ，猫を描くには思いのままに動く腕を磨かねばならない。

両氏の分析では，(1) は主文で，(2)・(3)・(4)・(5) と (6)・(7)・(8)・(9)・(10) は

それぞれ一つの“句群”となっている。これを図にまとめると次のようになろう。



単なるセンテンス同士の力関係から考えると、この分析法は合理的である。しかしながら文法学で強調される、形態素<単語<フレーズ<センテンス<“句群”という公式にはやはり当てはまらない。

4 本研究の論点

文法学者が主張する“句群”の概念及び具体的な分析法に関しては深く追究せず、また修正も行わない。筆者は本研究において、文章学者の張寿康氏が提起した概念、“語段”をより完全にしようと試みるものである。これについては以前、拙稿「中国語における文法論的文章論——説明文における文と段落の接続・連鎖——」⁹⁾で、「語」と「段落」の間に「節」という観点を導入すべきであり、さらに「節」の中には「支節」も存在すると主張したが、その際に詳細な検討は加えなかった。

一般に文章の単位は小さいものから順に、段落<部分(グループ)<節<章<篇と分類されている。この固定概念の“節”と、筆者の主張する「節」を区別するため、後者を「語落」という用語に改めた。これは張氏が提起した“語段”と基本的に同じであるが、今日では“句群”イコール“語段”という概念が広まっているため、あえて「語落」と呼び分けることにした。この観点は日本の文法論的文章論の権威である永野賢氏が触れなかった問題ではあるが、筆者は「文法論的文章論」の見地から、これをより掘り下げて考察していきたい。

今回の研究にあたり、資料として用いた文章の原典は次の通りである。①『読報刊 看中国』(上級)(潘兆明等編, 1992年1月版, 北京大学出版社)より34編。②『走進中国』(上級)(劉元満等編, 1997年7月版, 北京大学出版社)より30編。これら計64編の文章はいずれも“記叙文”, “議論文”, “説明文”, “実用文”で, 「文法論的文章論」で広義の「説明文」とされているものである。

説明文における「段落」と「語落」

そして分析の結果、文章の単位を次のように帰納するに至った。

篇 — 章 — 節 — 部分 — 大段落

— 小段落 — 大語落 — 小語落（— センテンス¹⁰⁾）

“篇”から始まり“小語落”に帰結するが、この間の関係は大から小とは限らず、平等の場合もある。

次に具体的な文章を分析し、これが実際的であるかを検討してみよう。

5 文章例

以下に挙げる文章中の通し番号は筆者が加えたものである。また文章中の記号の意味は次の通りである。

| / → 大段落 / | → 小段落
/ → 大語落 | → 小語落
| | → 結末（全体）

文章例（1）

〈原文〉

真正的女人是没有年龄的

《走进中国》p.76

（刘元满等编 1997年 北京大学出版社）

1 (1) ①我一直不明白，为什么许多人对初次见面的人总要问上一句：“您今年多大岁数啦？”甚至对初次见面的女士也不放过。| /

2 (2) ②其实，人本来就应该有三种年龄。③一是不可改变的“实际年龄”；二是可以变化的“生理年龄”；三是完全可以自我调整的“心理年龄”。/ ④如果心理、生理年龄衰老，二三十岁的年轻人也可能未老先衰。⑤而保持心态的年轻，则可使八九十岁的老人依旧朝气蓬勃，甚至连外表也比实际年龄年轻得多。/ |

(3) ⑥我认识一位可敬的百岁老人，他乐观、坦荡，一生都在尽力帮助别人。⑦现在不但身体健康，而且思维敏捷，记忆力惊人，皮肤光滑，皱纹比许多60多岁的老人还少。| /

3 (4) ⑧我常以这些人为榜样，保持心态的年轻。/ ⑨我对自己说，永远不要认为自己“老”。| ⑩我不断去做新的事、开辟新的领域，甚至敢于去进行一些新的“冒险”。⑪失败又有什么可怕？⑫如果我追求过、探索过、奋斗过，我就无怨无悔。⑬为此，我正在筹备一个钢琴学校和一个琴行。/ |

(5) ⑭我常常觉得时间不够用，每年除了开音乐会以外，我还要录音、录像，还有许多社会工作。⑮每天除了练琴、教学生外，还要买菜、做饭、打扫房间。／⑯快节奏的生活使我永远感到年轻，保持着充沛的精力，这些令我自豪。／|

(6) ⑰当然，作为一个女人，永远也别忘了健与美。／⑱我从不光顾“中老年服装”柜台，我买自己认为漂亮大方又不昂贵的服装；我注意保持身材苗条，每天自觉地从18层步行下楼，一星期还要步行上楼一次。| ⑲我吃健康食品，我抽时间去做皮肤护理。⑳我也不会忘记生活中最廉价的“美容”方法：吃剩的西瓜皮切成薄片敷在脸上，蛋壳里剩下的蛋清、牛奶瓶底剩下的几滴奶，都用作上等的“面膜”。一个希望“青春常驻”的女人，总会找到省时、省力、省钱的美容妙法。|／

4 (7) ㉒不知是谁曾说过：“真正的女人是没有年龄的。”㉓我常常记着这句话。||
〈日本語訳〉

真の女性に年齢はない

1 (1) ①私はずっと疑問に思っているのですが、なぜ初対面の人に対し、多くの人が決まって、「今年おいくつですか」と尋ねるのでしょうか。これは相手が初対面の女性であっても例外ではありません。|／

2 (2) ②実は、人には本来三つの年齢があります。③一つ目は変えることのできない「実年齢」、二つ目は変更可能な「生理的年齢」、三つ目は完全にコントロールが可能な「心の年齢」です。／④もし心の年齢と生理的年齢が高ければ、20歳、30歳の青年でも若くして老け込んでしまうかもしれません。⑤また心の若さを保てば、80歳、90歳の老人がいつまでも元気はつらつ、それどころか外見まで実年齢よりずっと若いということもあるのです。／|

(3) ⑥私の知り合いに100歳の尊敬すべきお年寄りがいます。楽観的で、気持ちのさっぱりした方で、生涯を通じて人助けに尽力されました。⑦今も健康であるだけでなく、頭の回転も速く、記憶力は驚異的、肌はつややか、しわもたいていの60過ぎの老人より少ないのです。|／

3 (4) ⑧私は常にこうした方たちを手本として、心の若さを保っています。／⑨決して自分が「老けた」と認めてはならない、と私は自分に言い聞かせています。| ⑩私は絶えず新しいことをし、新しい分野を開拓していますし、思い切って新しい「冒険」をすることすらあります。⑪失敗を恐れることがありますでしょうか。⑫自分が追い求め、探し求め、精一杯努力したのなら、恨みも悔いもありません。⑬ですから私は今、ピアノスクールとピアノ店を開く準備をしております。／|

(5) ⑭私はいつも時間が足りないと感じています。毎年コンサートを開くほか、レコーディングやビデオ撮影もしなければなりませんし、社会活動もあります。⑮毎日ピア

説明文における「段落」と「語落」

ノを練習し、生徒に教え、さらに買い物をして、料理を作り、部屋を掃除せねばなりません。／⑩テンポの速い生活のおかげで、私はずっと若さを感じていますし、常に精力がみなぎっています。これは私の自慢です。／|

(6) ⑪もちろん、一人の女性として、いくつになっても健康と美を忘れてはなりません。／⑫私は「中中年ファッション」の売り場で買い物をしたことがありません。きれいで上品、そして高くないと自分で思う服を買います。また私はスリムな体型を保つべく気を配っており、毎日18階から下まで行くのにわざと階段を使いますし、週に一度はこれを上ります。| ⑬私は健康食品を食べ、時間を割いてスキンケアに通っています。⑭暮らしの中で最も安価な「美容」法も忘れることはありません。食べ残したスイカの皮をスライスして顔の上のせ、卵の殻の中に残った卵白や牛乳瓶の底に残った数滴の牛乳を使って上質な「パック」にします。⑮「青春よいつまでも」と望む女性は、時間と手間、そしてお金を節約した賢い美容法を見つけ出すものです。|／

4 (7) ⑯誰が言ったのか知りませんが、「真の女性に年齢はない」のです。⑰私はこの言葉を常に心掛けています。||

さてここで、この文章の構造を小段落（すなわち「自然段落」のこと）ごとに分析してみよう。文中のかっこで囲まれた数字が小段落の番号である。

第1小段落：センテンスは一つだけである。この文章の作者は、まず自分の長年の疑問を提起して読者に考えさせ、これから述べる「女性の年齢」というテーマを示した。

第2小段落：文②から文⑤の四つのセンテンスで構成されている。文③は文②の具体的な説明であり、文④・⑤は文②・③の内容を受けて、展開した内容を示している。このため文②・③と文④・⑤の間を「/」で区切った。

第3小段落：文⑥と文⑦とで構成されている。ここでは「私の知っている100歳の老人」のことを述べているだけで、語落の区切りはない。

第4小段落：文⑧から文⑬の六つのセンテンスで構成されている。文⑨・⑩・⑪・⑫・⑬はいずれも文⑧の内容を踏まえ、それに関する新しい情報を提示しているため、この間が「大語落」の切れ目である。また文⑨と文⑩・⑪・⑫・⑬の間は「小語落」となっている。ここでは「心の若さを保つ」方法が述べられているが、その方法は二つ、すなわち「言」と「動」に分かれているためである。

第5小段落：文⑭・⑮・⑯で構成されている。文⑭・⑮はどちらも「忙しい理由」の説明であるという点で共通しているが、文⑯は文⑭・⑮と異なっている。文⑯は作者の「忙しい生活」に関する感想であり、文⑭・⑮と文⑯は二層構造になっているのである。

第6小段落：文⑰から文⑳の五つのセンテンスで構成されている。文⑰は第4小段落の文⑧と同様、この段落の「総括」となっている。また文⑰は単独で「大語落」となっており、

文⑬・⑭・⑮・⑯は四つの文が合わさって一つの「大語落」を形成している。さらに文⑬と文⑭・⑮・⑯はいずれも文⑰に関する記述であるが、二つの異なる角度から述べているため、二つの「小語落」とも考えられる。

第7小段落：二つのセンテンスに分かれているが、実は一続きのセンテンスである。

では小段落と大段落はどのように区別するのか。これについては小段落同士の意味上の緊密さから判断する。まず文⑤と⑥の内容のつながりから、小段落(2)と(3)が密接にかかわり合っていることが見て取れる。小段落(4)・(5)・(6)はみな、「作者が若さを保つために、いかに努力したか」という同一テーマについて述べている。小段落(7)は文章の「結論」であり、独立している。以上を踏まえ、この文章は四つの大段落に分かれていると判断できる。すなわち、第1大段落は小段落(1)、第2大段落は小段落(2)と(3)、第3大段落は小段落(4)・(5)・(6)、そして第4大段落は小段落(7)である。

小段落は文章中の自然段落とイコールである。大段落は従来の「意味段落」と概念はほぼ共通しているが、具体的に分析する際、「意味段落」よりいささか詳細になる。小段落と小段落の間の記号を「/|」としたのは、下向きに広がっており、「続き」のイメージを抱かせるからである。また、大段落と大段落の間の記号には「休止」を記号化した「|/」を用い、一つの締めくくりを表した。

「語落」は言葉の集まりであり、段落中の階層である。そして「語落」には「大語落」と「小語落」の区別がある。「大語落」は必ず「意味の完結した話題」について述べているが、ここで言う「意味の完結」とは、センテンスに基づくものではなく、文章全体の構成から観察せねばならない。「小語落」は「意味の完結した話題に関して、異なる角度から叙述するセンテンスもしくはセンテンスのグループ」を指す。例えば文⑭と文⑮は「角度が異なる」とは言えないため、「小語落」同士の関係ではない。この二つのセンテンスは句点で区切られているものの、文⑭の“我常常觉得时间不够用”は文⑮の文末までかかっているのである。この問題については、台湾の言語学者、曹逢甫氏がアメリカで発表した博士論文に詳しい。これもまた文法論的文章論の研究が待たれる課題である。

「大語落」のセンテンスの数は一つでも複数でも構わず、二つあるいはそれ以上の「小語落」から構成されることもある。ただし「大語落」が必ず「小語落」を含むというわけではない。同様に、「小語落」もセンテンスは一つでも複数でもよい。「小段落」は「大語落」や「小語落」で構成される場合もあれば、単独のセンテンスのみで、そのセンテンス自体が一つの語落であるということもあり得る。従って、文①も「大語落」である。

以上の説明を踏まえ、再び二つの文章例を見ながら、筆者の観点をさらに検証していきたい。文中に使用されている記号は先と同様である。

文章例 (2)

〈原文〉

不要一次爱个够

《走进中国》p.93

(刘元满等编 1997年 北京大学出版社)

1 (1) ①对一般人来说,赡养老人是不成问题的,只要不是丧尽天良、忘恩负义之徒,对父母都愿尽晚辈的义务。②而成问题的是,如何尽义务? / |

(2) ③很多子女的做法是化整为零以钱代情,过年过节回家热闹一下,平时就给父母一些生活费,或帮着添置些家电用具。 / |

(3) ④对此父母们是领情的,但未必满意。⑤如今的父母,经济上大都不成问题,养儿防老的传统观念已经有了新的解释。 | /

2 (4) ⑥就拿我们这一代来说,婚后不要孩子的越来越多,主要原因是我们没有后顾之忧。 / ⑦尽管如此,仍有许多人要生儿育女。⑧他们清楚子女是父母生命力的延续,有了子女,父母就不再畏惧衰老;子女是父母的梦,有了子女,父母就少了人生的遗憾;子女更是父母的慰藉,有了子女,父母就能感到旁人无法取代的温情和关心。⑨当人衰老时,任何功名利禄都不及骨肉之情能延生养老! | /

3 (5) ⑩我有一个朋友,他经济情况一般,无力给父母一流消费一流享受;他工作很忙,没时间陪父母长坐闲聊,但他的父母总能感到儿子的存在,总能体会到父子情浓、母子情深。 / |

(6) ⑪以前,他也同许多人一样,建立了小家庭后,没有事由就不回家。⑫结果,就像很多家庭那样,父母天天盼子女,子女来了又不知说什么;儿子女也觉得没趣,不如为父母办些“实事”。 / ⑬他发现,这种一次爱个够的孝敬方式,对父母对子女其实都是负担;对生活负担本来就重的子女来说,忠孝不能两全(忠当然是自己的小家庭);对父母来说,子女以打肿脸充胖子的代价尽孝,等于无时无刻地提醒自己老了,成了儿女的累赘。 | ⑭于是,他改变了关心父母的方式。 / |

(7) ⑮父母有看报的习惯,他就每天把单位的各类报纸借回家。⑯送报就是他回家的最好理由。⑰没事就多呆会儿,有事放下就走。 | ⑱大家都感到轻松自在。 | ⑲他还考虑到,送报纯粹是为父母,时间长了他们也会于心不忍,于是他就买了些花鸟。⑳他让父母相信这是他的爱好,而他自己家又没有培养这种爱好的条件。 / ㉑就这样,他天天到父母家照顾花鸟,送报倒成了顺便的事。㉒从此,父母家就有了鸟语花香的生机,还有了源源不断的精神食粮。 / |

(8) ㉓对儿子的良苦用心,父母很满足也很领情。㉔他也不算太费事,每天花二十分钟足矣。 | |

〈日本語訳〉

一時のいたわりでよしとするなかれ

1 (1) ①一般人にとって、親孝行するのは問題ではない。良心を欠いた忘恩の徒でない限り、両親に子供としての義務を果たしたいと願うものである。②問題となるのは、いかに義務を果たすかである。／|

(2) ③多くの子供たちのやり方は小出しであり、愛情の代わりに金を使う。正月や祝日は実家に帰ってにぎやかに過ごす、普段は両親にいくばくかの生活費を渡すか、家電製品の購入時に資金援助するだけである。／|

(3) ④これに対し、両親はありがたいと思うものの、満足しているとは限らない。⑤今日の両親は、経済的にはほとんど問題なく、「老後のために子供を育てる」という伝統的概念にはすでに新しい解釈が生まれている。|／

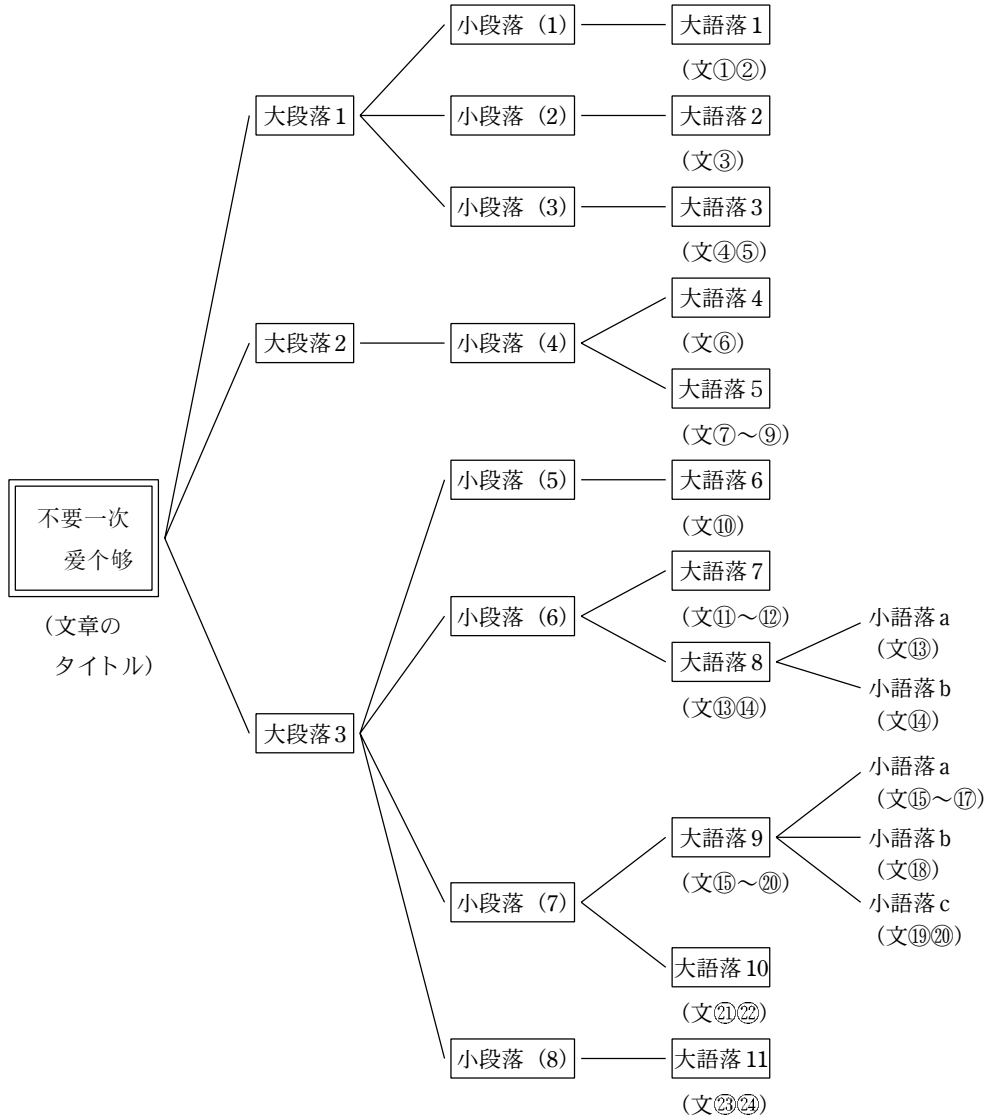
2 (4) ⑥我々の世代に関して言えば、結婚後、子供を欲しがらない者が増えつつある。我々には後顧の憂いがない、というのがその主な理由である。／⑦とはいえ、やはり多くの方が子供を産み育てたいと思っている。⑧彼らは承知しているのである。子供は両親の生命力から吹き出した芽であり、子供ができれば、両親は老いが怖くなくなる。子供は両親の夢であり、子供ができれば、両親は人生の悔いが減る。さらに子供は両親の慰めであり、子供ができれば、両親は他人が取って代われぬような優しさと思いやりを感じる。⑨年老いたとき、肉親の愛こそが寿命を延ばし、老いを養ってくれるのであり、いかなる名声も富も及ばない。|／

3 (5) ⑩私のある友人は、暮し向きが並程度で、両親に贅沢三昧させてやれるほどの甲斐性はない。また彼は仕事が忙しく、両親に付き合っ長々と無駄話をする時間もない。にもかかわらず、彼の両親は常に息子が身近にいると感じ、常に父と子、母と子の愛情の深さをしみじみと感ずることができる。／|

(6) ⑪以前彼はご多分にもれず、自分の家庭を築いてからは、理由がなければ実家に帰らなかった。⑫その結果は多くの家庭と変わらなかった。両親は日々子供を待ちわび、かといって子供が来ると何を話せばよいか分からない。子供にしてもつまらないし、両親に「実際的なこと」をしてあげるほうがましだと思う。／⑬そして彼は気づいた。この一時のいたわりでよしとする親孝行は、両親にとっても子供にとっても実は負担である。生活の負担がただでさえ重い子供たちにとって、忠孝を両立させることはできない（忠とは当然のことながら、自分の家庭のことである）。両親にとって、子供たちが身を削って孝行してくれるのは、自分が年老いたこと、子供のお荷物になってしまったことを始終思い知らされるに等しいことである。|⑭そこで彼は両親への思いやりの示し方を変えた。／|

説明文における「段落」と「語落」

文章例 (2) 構成図



(7) ⑮両親には新聞を読む習慣があったため、彼は毎日職場の新聞をいろいろ借りて実家へ帰った。⑯新聞配達は彼が実家へ帰る最良の口実となったのである。⑰暇であれば長居し、忙しいなら新聞を置いてすぐに立ち去る。| ⑱みんな気が楽になった。| ⑲彼はさらに考えた。新聞配達はもっぱら両親のためであるから、時間が経てば両親は気兼ねするようになろう。そこで彼は花や鳥を買ってきた。⑳彼は両親に、それは彼の趣味なのだが、自宅には花や鳥を世話する環境が整っていない、と信じ込ませた。／㉑こうして彼は

毎日花や鳥の世話をしに両親の家へ通い、新聞配達はそのついでの用事になった。②それからというもの、両親の家には鳥のさえずりと花の香りで活気が生まれ、尽きることない心の糧ももたらされたのである。／ |

(8) ③息子の細心の心配りに両親は満足し、ありがたくも思っている。④彼にとってもそんなに面倒なことではない。毎日20分で済むのだから。| |

この文章の小段落は八つ、大段落は三つである。さらに「語落段落」に細分化すると、「大語落」は11個、「小語落」は5個となる。具体的に言えば、第1大段落は小段落(1)・(2)・(3)、第2大段落は小段落(4)、第3大段落は小段落(5)・(6)・(7)・(8)という構成になっている。11個の「大語落」とは、文①・②、文③、文④・⑤、文⑥、文⑦・⑧・⑨、文⑩、文⑪・⑫、文⑬・⑭、文⑮から文⑳、文㉑・㉒、文㉓・㉔である。また5個の「小語落」はそれぞれ、文⑬、文⑭、文⑮・⑯・⑰、文⑱、文⑲・⑳となっている。つまり文⑬・⑭が形成する「大語落」は二つの「小語落」、すなわち文⑬と文⑭からなっている。そして文⑮から文⑳の「大語落」は三つの「小語落」、文⑮・⑯・⑰と文⑱及び文⑲・⑳で構成されている。これを図示してみよう。(文章例(2)構成図)

文章例(3)

〈原文〉

北京的胡同

《走进中国》p.63

(刘元满等编 1997年 北京大学出版社)

1 (1) ①建筑本应是一种文化，一种凝固的历史。②可惜，并不是所有的建筑都有文化，比如五十年代的突击性建筑就既不美观，又不结实，现在拆掉的正是这种建筑，而不是更老的房屋。／ |

(2) ③北京的幸运就在于它一建城的时候，其城市建筑和布局就凝聚了当时的最高文化。④封建时代说它有帝王气象、皇家风水，新中国成立后又继续是政治和文化中心，中国第一名城是当之无愧的首都北京。／⑤洛阳、西安等城市也曾是古都，可是朝代一换便衰退下来了。| |

2 (3) ⑥北京著名的皇家建筑自不必说，单讲北京的胡同，就是一笔丰富的历史遗产和文化遗产。／⑦它正南正北，正东正西，四通八达，如同一个方方正正的棋盘。⑧任何一个普通人，哪怕是不熟悉北京的外地人，进入北京的胡同只要方向不错就准能走得出去。| ⑨胡同体现了中国天圆地方和规规矩矩方块田的观念。／ |

(4) ⑩北京的胡同就是北京的风水，北京城的经络。⑪经络通则北京城就健康、兴旺。／⑫正因为北京有这样的胡同，才养育了北京人的性格，从整体来说他们和首都都是相

説明文における「段落」と「語落」

称的，正直通达，关心政治，关心国家大事，在历代政治风浪中，每当国家民族面临生死存亡的关头，北京人都站在最前面。／|

(5) ⑬几乎每一条胡同都有自己的故事，都有自己值得骄傲的历史。| ⑭一条胡同挂着许多四合院，每个四合院又各有特点。⑮一个外地人不走北京的胡同，不进北京的四合院，就不算真正到过北京。⑯而走进了北京的胡同，又如同走进了中国的历史。| ⑰四合院代表了中国的传统文化，大都像庙一样坐北朝南，大人物可以住，普通百姓也可以住；四代、五代同堂可以住，儿女独立门户也可以住。⑱从外表看不起眼，里面却不知住着什么样的人物。／⑲可以说北京的胡同里藏龙卧虎。／|

(6) ⑳北京的胡同决定了北京的风格：招贤纳士，宽厚量大。| ㉑四面八方的人都可以到北京来，都会受到同样的重视，得到发展的机会。㉒它欢迎来工作的，欢迎来旅游的，欢迎来叙友谊谈生意的，如大海迎百川，它欢迎一切人。|／

3 (7) ㉓北京胡同是北京人的福气，也是进京的外地人的福气。| |

〈日本語訳〉

北京の横町

1 (1) ①建築物は本来ある種の文化，歴史の集大成であるべきである。②しかし残念ながら，すべての建築物が文化的であるわけではない。例えば50年代の突貫工事で建設された建築物は美しさと耐久性に欠ける。現在解体されているのはこうした建築物であり，それ以前のものではない。／|

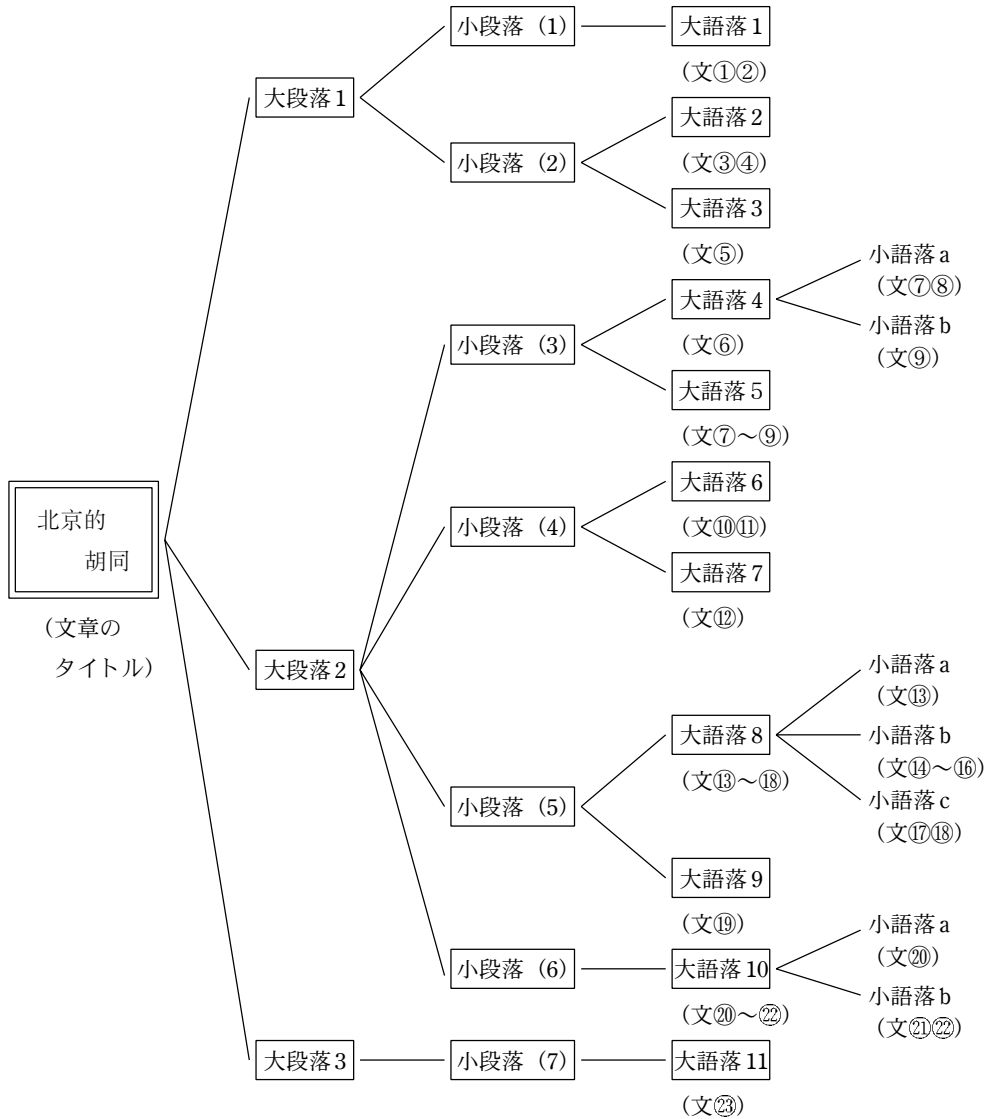
(2) ③北京は建設期から幸運に恵まれ，その都市建設と設計には当時の文化の粋が集められた。④封建時代，北京には帝王の風格と王家の地相が備わっているとされ，新中国成立後も，政治と文化の中心であり続けている。中国第一の都市，それは首都の名に恥じない北京なのである。／⑤洛陽や西安などもかつて都であったが，王朝の交代とともに衰退していった。|／

2 (3) ⑥北京の名高い王宮建築物については改めて述べるまでもないが，北京の横町一つとってみても，豊かな歴史遺産，文化遺産である。／⑦横町は真南から真北，真東から真西へと四方八方に通じており，まるできちんと四角に区切られた碁盤の目のようである。⑧北京の横町に入り込んで，誰であろうと，たとえ上京して来て土地鑑のない人であっても，方向さえ間違えなければ必ず抜け出せる。| ⑨横町は中国の「天は円形，地は方形」，そして「整然と分けされた方形の田」という思想を具現しているのである。／|

(4) ⑩北京の横町は北京における風水の所産であり，北京の街の経絡である。⑪経絡の通りがよければ北京は安泰であり，繁栄する。／⑫北京のこうした横町があったからこそ，北京人の性格が形成されたのである。全般的に見て，彼らは首都と好一対をなしてい

る。正直で道理に通じ、政治に関心を持ち、国家の大事を気にかける。各時代に巻き起こった政治の荒波の中、国家や民族の危急存亡のときに、北京人はいつも最前線に立たされた。／|

文章例 (3) 構成図



(5) ⑬ほとんどすべての横町に、それぞれの物語と誇るべき歴史がある。| ⑭一つの横町には多くの四合院（注：中国北方の伝統家屋）が並び、どの四合院にもまたそれぞれの特徴がある。⑮よそから来た人が北京の横町を歩かず、北京の四合院に入らなければ、

説明文における「段落」と「語落」

本当に北京へ来たとは言えない。⑩北京の横町に足を踏み入れることは、中国の歴史をたどるようなものである。| ⑪四合院は中国の伝統文化を象徴しており、大部分が廟のように南向きで、北側に建てられている。大人物が住むもよし、庶民が住むもよし。四世代、五世代が一緒に住むもよし、子供が一本立ちして住むもよし。⑫外観はぱっとしないが、中にどんな人材が住んでいるか分からない。/ ⑬北京の横町には逸材が隠れていると言えよう。/ |

(6) ⑭広く人材を求め、寛大で包容力がある——この北京の気風を醸成したのは北京の横町である。| ⑮北京は来る者を拒まない。そして北京にやって来たすべての人に、平等な評価と成功のチャンスが与えられるであろう。⑯北京は働きに来る人、観光に来る人、友好やビジネスのためにやって来る人を歓迎する。海があまたの川を受け入れるように、北京はすべての人を喜んで迎え入れるのである。| /

3 (7) ⑰北京の横町は北京人にとって天の恵みであり、上京してきた人々にとってもまた然りである。| |

(文中の注は筆者による)

この文章の段落と語落を先と同様に図示してみよう。(文章例(3)構成図)

6 おわりに

一般的な説明文を分析する際、従来は文章をいきなり「意味段落」に分け、各段落の趣意を帰納し、主題を総括するという、牛刀を振るうような手法が取られてきた。しかし正確に作者の意図を理解し、把握するためには、文章を繰り返し読み込んだ上で、次のような手順を踏むべきである。

中層——センテンス・語落・段落の接続と連鎖

↓

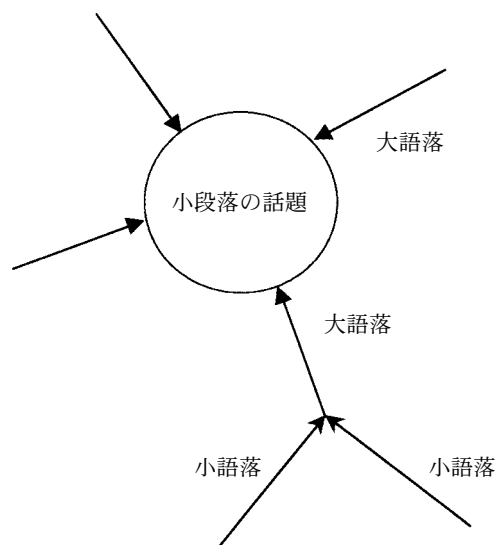
深層——主語・陳述・主要語句の連鎖

↓

表層——統括(中層と深層を一本化するもの)

この観点については、筆者が2000年12月に本紀要で発表した「中国語における文法論的文章論——説明文における文と段落の接続・連鎖——」において詳述したが、今回は新たに上図へ「語落」を加えた。つまりセンテンスからいきなり段落へ飛躍するのではなく、段落に分ける前に、段落の中の「語落」、すなわち段落中の階層を分析するのである。各小段落には必ず小段落ごとの中心の話題があり、時にこれに関して一つあるいはそれ以上の「叙述の中心」が加わることがある。さらにその叙述の観点は一つとは限らず、一つあるい

はそれ以上の「叙述の角度」から述べられる場合もある。この段落中の「叙述の中心」とは「大語落」であり、「叙述の角度」が「小語落」なのである。ここで言う「中心」と「角度」はいずれもばらばらなものではなく、「小段落の話題」を中心とし、求心力を持つ。例えば複数の語落なら、次のような図で表すことができよう。



ただし、「大語落」は必ずしも「小語落」を含むとは限らない。また最もシンプルな「小段落」の場合、一つのセンテンスのみで、このセンテンス自体が「小段落」であり、「大語落」でもあり、さらには「大段落」でもある、ということもあり得る。こうしたケースは文章例(1)に見られた。

「語落」を分析するプロセスにおいて、「小段落」同士の関係はもちろん、「大段落」の区切りも容易に把握できる。そして「語落」の分析には、センテンス同士の関係の分析が欠かせない。これに関しては前述の拙稿第4章で詳しく述べた。

「語落」の記号については、「大語落」に「/」、小語落」に「|」を用いた。そしてこの二つを組み合わせ、「/|」と「|/」及び「||」が生まれたわけである。下向きに広がる「/|」は「続き」を意味し、「小段落」の記号となっている。これに対するのが「大段落」の記号「|/」であり、「||」は全体の結末を表す。

「語落」と「句群」の大きな違いは二つある。まず、根本的な観点が異なっている。「語落」は「文法論的文章論」という見地から文章を分析した結果生まれた概念であるが、「句群」は文法論の観点から生まれたものである。もう一つは、「句群」はセンテンスの数が二つもしくは二つ以上に限られているのに対し、「語落」のそれは一つであっても、二つもしくは二つ以上であってもよいという点である。

説明文における「段落」と「語落」

最後に今回の考察から、文章（説明文）の中層構造についてまとめておこう。

文章 — 大段落 — 小段落 — 大語落 — 小語落（— センテンス）

注

- 1) ここで述べている「説明文」という概念は、中国語で言う“説明文”とは異なり、永野賢氏の説に従っている。主に中国語での“記叙文”，“議論文”，“説明文”，“実用文”を指している。
- 2) 日本語の「文章論」のことを、中国語学界では“文章学”と称する。中国語が漢字に敏感である点を考慮し、中国人学者の学説を引用したり説明したりする際、本稿では“文章学”と、元の名称で記す。
- 3) “句群”には「文群」という日本語の訳語があるが、本稿では中国語の名称をそのまま記す。
- 4) 呂叔湘（1979）『漢語語法分析問題』 p.53 商務印書館
- 5) 呉為章・田小琳（2000）『漢語句群』 p.18 商務印書館
- 6) 呉為章・田小琳（2000）『漢語句群』 p.22 商務印書館
- 7) 張寿康（1985）『文章学導論』 p.60 湖北教育出版社
- 8) 呉為章・田小琳（2000）『漢語句群』 p.153 商務印書館
- 9) 鄭高咏（2000）「中国語における文法論的文章論——説明文における文と段落の接続・連鎖——」愛知大学紀要『言語と文化』第4号 p.64, p.66
- 10) 文章の最小単位は一体何であるのか、今後の研究課題として追究したい。